

ISBN4-06-136235-6

C0193 P400E (2)



1910193004008

ナポレオン狂
阿刀田高

定価400円
(本体388円)

あ
4
3

白
らナポレオンの生まれ変りと信じ切
っている男、はたまたナポレオンの
遺品を完璧にそろえたいコレクター。そ
の両者を引き合わせた結果とは？ ダー
ル、スレッサーに匹敵する短篇小説の名
手が、卓抜の切れ味を発揮した直木賞受賞
の傑作集。第32回日本推理作家協会賞受
賞の「来訪者」も収録する。



ナポレオン^{きよう}狂

あとうだ たかし
阿刀田 高

© Takashi Atoda 1982

1982年7月15日第1刷発行

1993年6月30日第25刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-136235-6

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

ナポレオン狂

阿刀田 高

講談社

目次

ナポレオン狂 5

来訪者 33

サン・ジェルマン伯爵考 59

恋は思案の外 83

裏側 103

甲虫の遁走曲 126

ゴルフ事始め 147

振れた夜 170

透明魚 198

蒼空 210

白い歯 216

狂暴なライオン 225

縄―編集者への手紙― 251

解説 尾崎秀樹 273

ナポレオン狂

狂気と正常とは、ある明確な一線を境にしてキツカリと左右に峻別しゅんべつされるものではあるまい。もちろん大部分の人間は完全に正常であり、またひとめで狂気とわかる人間もいる。だが、その境界線あたりに位置する人というのも当然存在するはずである。正常と見なされていながら狂気の傾向を色濃く内蔵している人や、あるいはその反対に奇態な言動を示しながらもその実けっして病的とは言えない人格も私たちの周辺に生きて生活していることだろう。

私はこれまでにそんな人間に二人めぐりあった。その二人がともにナポレオン・ボナパルトに關係があるというのも奇妙な偶然であった。一人は南沢金兵衛氏、もう一人は……そう、たしか村瀬なにがしという五十年輩の男である。

南沢金兵衛氏を狂気と呼ぶのは正当な医学的判断からではない。同氏はどこまでもノルマルな社会人であり、技術者としては多分人並み優れた手腕を持っているだろう。

ただ飯より野球の好きな人を野球狂と言ひ、女色にうつつをぬかす男を女狂いと呼ぶのと同様

な意味合いで南沢氏も「狂」の部分を持っている。これは本当だ。さしずめナポレオン狂とでも呼ぶべきであろうか。

私の知るところでは南沢金兵衛は明治の末年に福井県の貧しい農家の三男坊として生まれた。子どものときから勉強好きの少年であつたらしい。高等小学校を出たのち村役場、印刷所、薬問屋などさまざまな職場で働いた。十六歳のとき彼はたまたま長瀬鳳輔の「ナポレオン伝」を読んで強烈な啓示を受けた。後年彼自身が語っているところによれば「読後は血が騒いで一睡もできなかった。これこそ人類が生んだ最高の人格だと思った。どうしたらナポレオンにめぐりあえるか……いえ、笑いごとではなく真剣にそう考えたんですよ。とても無理な話でしょう。百年も昔に死んでいるんですからね。で、せめてナポレオンについて一切適切どんな知識でも集めてみようと思ひ立ったのです」といった種類の熱い啓示であつた。

ナポレオン・ボナパルトがそれほど高貴な人格であつたかどうか、その点は問うところではない。おそらく長瀬鳳輔の「ナポレオン伝」は歴史の英雄を過度に美化して描いているにちがいない。だが一人の少年がその人物像に激しい憧憬を抱いたのは真実であつた。こうして南沢金兵衛のナポレオンに関するコレクションが始まつた。

当初は田舎町の小さな書店に散見されるナポレオン伝や西洋史料の数冊を買い集めるだけだつたらう。書棚に積む本が一冊二冊と増えるにつれ少年の夢はさらに広がり、その志は成人してからも少しも縮まろうとしなかつた。

一方、南沢金兵衛は薬問屋に奉公するかたわら薬包機についてちよつとした工夫を凝らし、こ

れが特許を取り実用化されるにつれ経済的にも躍進するチャンスを見出した。聞くところによれば南沢氏が包装機器について所持している特許は現在実用に供せられているものだけで十数種、そのほか菓子製造機にもいくつの特許を持っていて、これらが過去数十年にわたって相当の資力を彼にもたしらしてくれたことは想像に難くない。

南沢金兵衛はナポレオンを除いてほとんどなんの趣味も持たなかった。タバコは吸わず酒は少少、それも宴会の席などで勧められてわずかに口をつける程度である。結婚はしたが子どもには恵まれなかった。

つまり南沢氏の人生は、一方では包装機器類の特許を取ってこれを実用化するという、すこぶる実際の側面があり、もう一方ではただひたすらナポレオンの事蹟を集めること、この二つしかなかった。さらに言えば、すべての経済活動でさえナポレオン皇帝に奉仕する補助的なものであったのかもしれない。彼は収入のほとんどを——妻と自分が生活できるほんのわずかなものを除いて他の一切をナポレオンのために消費し続けた。

その結果、東京・世田谷の郊外にナポレオン記念館と呼ばれる四階建ての城館がある。財団法人の形を取っているが、ことごとく南沢氏の個人的コレクションであることは疑いない。老夫婦は四階の片隅に自分たちのための住居を作り、あとの三つの階はすべて南沢金兵衛が生涯を賭して集めたナポレオン関係のコレクションで埋まっている。

ナポレオン記念館は、依頼があれば一般の人々にもコレクションの一部を瞥見べっけんさせてくれるが、その設立の経緯からも明らかなように本来が個人の狂的なコレクションの集積である。南沢

氏が自分のために集め、自分の楽しみのために陳列したものだ。他人に見せるのが目的ではない。記念館には雑務を担当する女子職員と掃除夫が一人ずつ雇われているが、この人たちはコレクションの内容についてまったく知識がない。蒐集^{しゅうしゅう}も整理も南沢氏が一人で取り仕切っている。

その蒐集には今でも月額百万円以上の費用が当てられているそうだ。

蒐集の範囲は——これも南沢氏自身が言うのだが、

「ええ、それはもうナポレオンに関するものはなんでも集めますよ。玄関のところにある凱旋門、あれは死後百年祭のときフランスで作られたものです。三十分の一の正確なミニアチュアでしてね。遺品があればむろんのこと、ナポレオンの作品、ナポレオンについて書かれたものは全部……。トルストイの『戦争と平和』なんか何種類ありますかなあ。先日もある劇団がバーナー・ショウの『運命の人』を上演しましてね、なにしろこれはナポレオン皇帝が主人公ですから、その舞台写真をそっくり焼き増してもらいましたよ。とにかくナポレオンという字が書いてあれば雑誌でも新聞でも切り抜いてみんなファイルにしています」

「ブランドイも？」

「いや、あれは皇帝とは直接関係ありませんから……。例えば週刊誌のどこかにナポレオンについてたった一行でも書いてあるとするでしょう。胃癌だったとか、^{アンヴァリッド}廃兵院の遺骨は贗物^{にせもの}だとか。するとその雑誌を買ってコレクションに加えます」

「それは大変だ」

「まあ、長い経験でなんとか。いろんな本屋さんに頼んであるし、新聞雑誌の切り抜きをする会社も三社ほど契約してあります。あとは私自身ひまさえあれば本屋さんに立ち寄って……はい、雑誌のページをめくっているとなんとなくこのへんにナポレオンが隠れていそうだって、そんな気がして来るんですね。不思議なものです。で、搜してみるとやっぱりナポレオンさんが見つかるんですね」

南沢氏はふくよかな赤ら顔を一層無邪気に脹らませてこう言うのだった。

今では記念館のコレクションはフランス政府が勲章を与えるほどのものになっている。

話の順序が逆になってしまったが、私が南沢氏と知り合ったのは大学の恩師の紹介でほんの一時期フランス語の個人教授を勤めたからである。

ナポレオン関係の蒐集となれば、ある程度までフランス語が読めるほうが望ましい。南沢氏はずっと若い頃に独学でフランス語を学び、その後アテネ・フランセに通って一通りの勉強はしたらしいが、その頃は実業のほうに忙しくてなかなか語学まで手が廻らなかった。

六十の坂を越え「もういくらも進歩しないでしょうけれど老人の手習いという言葉もありますから……ホッホッホ」ということで、適当な個人講師を搜しているとき、たまたま私が紹介されたというわけだ。

私はタレイランの「回顧録」をテキストに選び、週に二回ほど南沢氏の余暇にあわせて家庭教師を勤めた。フランス語の学力は率直に言ってそうたいしたものではなかったが、その熱意のほどには頭のさがるものがあつた。

本の余白には講読を前にして辞書を引いて丹念に下調べをしたらしい跡がびっしりと書き込まれてあった。テキストの内容がナポレオンに関係して来ると、南沢氏の眼は熱く輝いて息遣い（いきづか）まが荒くなった。

タレイランはナポレオンのもとで外務大臣を務めながら最後に手ひどく裏切った男である。もともと権謀術数にたけた政略家であったが、ナポレオンがロシヤ皇帝と接触するようになってからの暗躍ぶりはますますドス黒く、隠微なものとなった。なにしろ露帝アレクサンダーは、ナポレオンと外交折衝を交わす前にタレイランからフランス側の情報をひそかに得ていたのだから、この外交ゲームでナポレオンがいい目を見るはずがなかった。言ってみれば、日本の首相がアメリカ大統領と会見する前に大統領が日本の外務大臣から手のうちを知らされているようなものであった。

もちろんタレイランにはタレイランなりの言い分がある。なんぴとも信じないこの辣腕（らつたん）の外交家は、ナポレオンの跳ねあがり（はねあがり）に危惧を感じていたし、アレクサンダーの弱点も見抜いていた。ナポレオンを飛び越してフランスの将来を考えていたはずである。

そのへんの策略と心理のあやが「回顧録」の随所に織り込まれていて、私にはすこぶる興味深く、ときには痛快でさえあったが、南沢氏はそれとはべつな感慨を抱いたようだ。

テキストの中身がタレイランの裏切りの部分に及ぶと、顔を引きつらせ、

「こんな男を信頼しなかったら、皇帝陛下はロシヤに遠征する必要もなかったし、みじめな敗北もなかったんです」

と、呻くように言うのだった。なまじタレイランの弁護でもしようものなら一気に怒りが爆発し、お出入り差し止めになりそうな雰囲気であった。

日頃温厚な南沢氏からは想像のできない一面である。南沢氏のナポレオンに対する敬愛がなみなみならないことを——「狂」にまで近いことをあらためて知らされるのはいつもこんなときであった。

家庭教師は二年ほど続いた。

当然のことながらその期間のうちに私は何度かコレクションに接する機会を得た。ナポレオン自身の著述や書簡類はもちろんのこと、各国語の評伝、研究、関連史料、ナポレオンの登場する小説、戯曲、さらには遺品、記念切手、コインのたぐいまで、その種類も数もおびただしい。

先にも述べたように記念館のコレクションは、しかるべき紹介さえあれば一般の人にも観覧を許すたてまえになっているが、これはごく代表的なものに限られている。一階の陳列室はそのためのものと言ってもよい。コレクターのつねとして南沢氏にも「見せ惜しみ」をするとところがあった。

相手がその道についていくらか詳しい人とわかると二階に案内してもう少し特別のコレクションを見せてくれる。気心の知れた人なら三階の鍵をあけてさらに秘蔵の品を垣間見せてくれることもある。館の中はあちこちに鍵の掛かった小部屋があつて、さながら鎖された十七、八世紀の故宮といった趣きである。

いったい私はどの程度までコレクションを拝見させてもらったのだろうか。

「ナポレオンは妻のジョセフィーヌに何百通も手紙を書いているんですね。ところがジョセフィーヌは薄情で、ほとんど返事を書かなかったんですよ」

「そうらしいですね」

「現在残っているジョセフィーヌの手紙はたった二通だけ。でも私はそれ以外の一通を手に入れました。大変な珍品です」

こう言つて研究家も知らない秘宝を閲覧させてくれたくらいだから、コレクションの相当に深い部分まで見せてもらったことは確かだろう。おそらく南沢氏自身を除いては一番と言つていいほどに。

とはいえ——これは漠然とそう考えているだけなのだが——そんな私にさえ見せようとしない極秘の品々がまだまだあの館のどこかに隠されているだろうことは、蒐集家の一般的な性癖から考へて充分にありうるだろう、と私は思っていた。

だが……それはともかく私はしばらく南沢金兵衛を離れて、もう一人のナポレオン狂について語らなければなるまい。

話は唐突だが、河豚のみりん干しは私の大好物である。飴色に透すけているのを電熱器であぶり、表面にいくらか焦げめがつくまで焼く。それをちぎって食べると、日本酒にも洋酒にもよくあう。

ただ東京のデパートあたりで買った品物はどうかすると身が薄く、しかもいくら噛んでもゴム

のように歯切れがわるい。やはり原料となる河豚そのもののよしあしが、加工後の味わいにずいぶんと影響するもののようなのだ。

こんなことを言い出したのはほかでもない。その男の記憶はいつも河豚のみりん干しといっしよにやって来る……。

去年の夏、大学の休みも残り少なくなった頃だと思うのだが、私は奇妙な男の訪問を受けた。初めてその男の顔を見たとき私は日本人にしてはひどくバタ臭い顔だと思った。眼と眼の間隔が狭く、しかも眼窩は相当に深く落ち凹んでいる。鼻梁は細く、細いまま長く伸びている。明らかに欧米人の血の混入した風貌と見て取った。しかし背丈はごく普通の日本人並みで、いかつい肩幅が、身長と比べていささかアンバランスな印象を添えていた。

広く禿げあがった額と、そこにへばりつくように垂れている軟かい巻き毛を見ているうちに私はこの顔はだれかに似ていると思った。

「村瀬……と言いますです」

フルネームを言ったのだろうが、下半分の記憶はない。言葉遣いには地方の人が無理に標準語を使ったときの、ぎごちない調子があった。

その男が私を訪ねて来た理由は、たまたま私がある大衆雑誌の随筆欄にナポレオンの生誕地を旅行したときの印象記を載せていて、それを読んだ彼が私をナポレオン研究の専門家と考えたためらしい。

挨拶めいた会話を交わしたあとで彼が突然オドオドと、しかし厳粛に宣言した。

「あの……私、ナポレオンの生まれ変わりですたい」

「はあ？」

初めは言葉の意味がよく呑み込めなかった。理解したとたんこれはなにかのジョークだと思った。

男の様子には、どこか田舎の老爺が一心に思いつめたような頑^{かたく}なさ^なさはあったが、少なくとも異常を感じさせるところは少しもなかったのだから。

「どうしてです？」

私は茶化すように尋ね返した。

「私、日本人にしては、まあ、ちいっとべつな顔ばしをととちがいますか。幼^{こまか}ときからそげんでしたとです。みんなに「アメ公、アメ公」いわれて、いじめられたですたい。お袋が毛唐と寝たとじやろいうて蔭口ばたたかれたです」

「ええ……」

「中学行ったら先生に「お前はナポレオンみたいだ」と、そげんに言われて、あだ名もナポレオンになってしもたとです」

「なるほど」

だれかに似ていると思ったのは、その顔だった。日本人の中にコルシカ生まれの英雄そっくりの顔があるうとは、私にとっても奇異なことであった。

「私は、はあ、ナポレオンと言う人の写真とかそげんなもん、そりまで見たこともなかもんです

けん「そげなもんか」と思^{おも}ただけじゃったが、あとでこう本にある写真ば見たらほんなこつよう似とったです。なんか妙な気持ちなつてしもて、こりや前世はナポレオンじゃったかもしれんと、はあ、そげん思いましたです」

「そうですか」

おかしな話にはちがいないが部分的には合点のいかないことでもない。ある日突然自分の容姿が歴史上の人物に似ていると気がつく。と、自分がその人の生まれ変わりではないかと思う。どこまで信じ込むかは別問題として、その心理はそれほど突飛ではあるまい。

「それからナポレオンち言う人に氣イかけるようになりましてなあ。そげん言うても私ら田舎もンですばい、ろくなもん読まんとです。じゃが氣イ掛けてみると、子どもの時分からよう寂しか島の景色ば夢に見たとです。行つたこともなかとになあ。海の上になんかこう黒い雲がドロんと垂れとつて……こりが、その、なんち言いよつたか」

「セント・ヘレナ島ですか。ナポレオンが最後に流された」

「あ、それです。馬小屋みたいな、ごつか家^{うち}にも、はあ、覚えがあるとです。ジョセヒンち言う人は、何回写真ば見せられても覚えがなかとですが、もう一人、なんち言うおなごじやつたか……」

男は口籠^{くちごも}りながらポケットから手帖を取り出し、ささくれたページをめくりながら、

「ワレフ……ワレフスカ、そう、こん人はたしか見たことがありますばい、夢ン中で」

「ワレフスカというのはポーランドの恋人でしたね。貴族の奥さんで、最後までナポレオンを愛